

訪問看護



No.8

問 訪問看護ステーション
☎ 32 - 2416

ステーション便り

訪問看護をご利用いただくことで、持病の悪化を予防できた事例をご紹介します。

『誤嚥性肺炎の再発を予防できたAさん』

Aさん：98歳男性 誤嚥性肺炎 要介護4
長男夫婦、孫の4人暮らし



毎月入退院を繰り返していた

加齢に伴い飲み込む力が弱くなり、食事のむせ込みが強く途中で中断していました。

また、咳込む力が弱いため、痰が絡んでいても、うまく出すことができませんでした。そのため、慢性的に誤嚥している状況で、繰り返し肺炎を起こして入院していました。そこで、ケアマネジャーから訪問看護を紹介され開始となりました。

Aさん：家にいたい
ご家族：1日でも長く家で過ごせるように支えたい

ご本人とご家族に、「どのように過ごしたいか」を伺いました。

飲み込みの体操、食事の工夫、体調変化時の早めの対応をして、「3カ月自宅でご過ごすことができる」を目標としました。

言語療法士による 飲み込みの評価



「とろみ食」なら誤嚥しないことを確認しました

飲み込みの様子の確認や、体操実施のため、昼食前に訪問看護に伺いました。

口の中を整えて

食事の前に、口の中の痛み・炎症・乾燥の有無や舌の動き・色などを観察して、トラブルがあれば対応しました。



筋肉をほくして

マッサージや嚥下体操をすることで、飲み込みに関係する筋肉を動かし、食事の準備をしました。



食事を工夫して

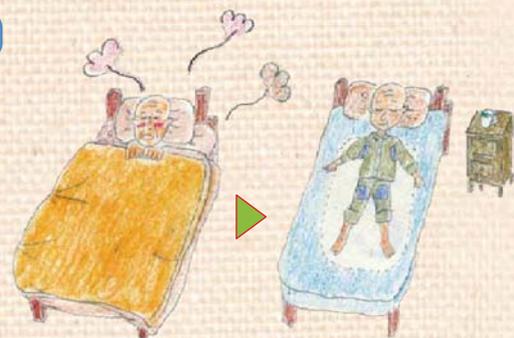
食事は「とろみ食」でも、Aさん宅の味を楽しめるように、また、ご家族の負担が少なくすむよう、ご家族が召し上がる食事と同じものをハンドミキサーで作ることを提案しました。



体調変化時の早期対応：介護方法

発熱時は、布団を掛けて温めていたご家族。高熱が続き、体調が悪化していました。

そこで、対応を①訪問看護に連絡する②悪寒がなければ、掛物を薄くして冷やし、水分補給③必要時に投薬、としました。



Aさんは、訪問看護開始から18カ月間 ご自宅で過ごすことができました。

訪問看護が開始され、24時間365日対応の体調管理や介護相談・指導により介護する力を引き出すことができたこと、医師・言語療法士・ケアマネジャー・ディサービスなどAさんに関わるサービス担当者で連携をとることで、『誤嚥性肺炎の悪化を18カ月間予防』できました。

痰を出す

痰が自分で出せるように「咳払い」の練習や、肺の機能を高めるために、大きな声で「懐メロ」を歌いました。

また、痰が取りきれない時のために吸引器をレンタルしてご家族にも使い方を覚えていただきました。